

Allen Ginsberg からみた世界観 — 逸脱する視点はあらゆる価値観から自由である —

三 上 昭 人

序章

第一章 “So What Beat Generation”

第二章 “Allen Ginsberg in Kyoto”

第三章 “So What Allen Ginsberg”

最終章 “Break on through to the Other Side”

Allen Ginsberg とは一体何者だろうか。狂気のカリカリ詩人か？ 我国流でいう還暦を迎えた現在、Bob Dylan の言った反対派詩人のイメージはかなり薄れてきたことは確かだ。

Ginsberg の “Howl” は Jack Kerouac の “On the Road” と共に唯物論的価値を否定する Beat の特徴を描き出して、アメリカにおける新しい何かの出現を多くの読者に知らしめたように思われる。確かに “Howl” や “On the Road” が出版される前から、1950年代のアメリカには非同調者、あるいはボヘミアンとして生活している何千人もの人々がいたが、Ginsberg や Kerouac が己のライフスタイルを見事に描写し、古い良きアメリカの友情や自由の重要性を強力に擁護したことによって、彼らの本が既成の価値観に対する一つの脅威となり、あらゆる種の反発を買うこととなった。Beat Generation の作家たちは後に Ginsberg が存在の幻影的本質と呼んだ実存のはかなさに対する共通の認識を持っていた。Ginsberg にとって Beat 的であるということは、社会的の善悪の概念を超えて、社会を裏側から見つめることなのだ。

1988年、11月3日、京都大学西部講堂において Allen Ginsberg の詩の朗読会がおこなわれた。だが、そこでは50年代に登場した、燃えるような予言の叫びは存在しなかった。石垣島・白保のサンゴ礁の保護を呼びかけ、反核団体と共に朗読会を開く Ginsberg のその姿は “Howl” から感じられた狂熱は感じられない。彼はもう過去の人となってしまったのだろうか。

Allen Ginsberg はただ吠えているばかりの詩人ではない。“Howl” のファクシミリ版がそのことを証明する。彼も書く詩人であった事実も忘れるわけにはいかない。だが、Ginsberg の詩には、それでもなお、詩語の圧縮、集中に欠いていると思われるところがある。彼には才能がないのか。実はそうではない。A. Ginsberg は詩的言語から逸脱することによって、既成の価値観、あらゆる概念から飛びだし、外側（裏側）からの視点を手に入れるのだ。Ginsberg はそこで自由となり、色々な価値観に縛られた私たちを見て笑うのである。彼は概念というかんじがらめの街から飛びだしたチンピラであり、その世界観はシニカルであろう。

（指導教員 中村 敦志）

e.e.cummings の詩における前衛絵画性

浅 野 大 成

e.e.cummings は1894年にマサチューセッツ州ケンブリッジに生まれた詩人、小説家、画家である。二十世紀のアメリカにおいてパウンドやウィリアムズとならんでもっとも実験的活動をした詩人のひとりである。e.e.cummings は第一次大戦後しばらくのあいだ滞在していたフランスの新しい文学運動からの影響を受けたと思われる植字法によって伝統を無視し、破壊的な作品を作り上げたのである。滞在していた当時のフランス文学はダダやシュールレアリズムなど新しい運動があり、パリで発行された本には書名も著者名も大文字はひとつも使われていないものや、文字を横にしたり上下にずらしたりした方法を使ったものがあつた。こういったものの影響を受け cummings は作品に取り入れていったと思う。しかし、何故、世界的には最初ではない cummings の手法が見とめられたのだろうかを2、3編の詩を例にとって考察していきたい。

まず、“in Just-”から考えていきたい。この詩は早春を歌ったものであり、それを表現するために言葉を解体したり、溶接したりしたものである。大文字の使い方も一般的な詩とは違った使い方をしている。例えば、“in Just-”の題にしても春が来たことを読み手に強く訴えかける為に Just の J を大文字にしたと思う。それから、“goat-footed”という言葉を使ってギリシア神話の Pan を読み手に連想させるのも春を強く印象づけるのである。

次に絵画的な詩として“l(a)”という作品を考察していくことにする。この作品は絵画においての同時主義を用いたものだと思う。葉が落ちていくと同時にその時感じる心を描くために言葉を解体したのだと思う。そうすることによって普通の詩の様に一行ずつ書くよりも感じることと見たことが同時に行なわれたことがいっそう感じられると思う。

cummings の前衛的なものにはダダやシュールレアリズムといったものの影響を受け絵画の手法をそのまま詩におきかえたことにあると思う。前衛的なものには受け手によっての解釈によって意味を持ったり意味など一つも無かったりする。それは前衛的なものにとっての強味であったり弱味でもある。

cummings の詩に対する基本的な考え方は「学生に対する詩人の忠告」に書かれている。「詩とは感じることであって、知ったり、信じたり、考えることではない。」cummings は感じることから物ごとを創り出していったに違いない。

(指導教員 中村 敦志)

Emily Dickinson の詩に見る生と死、その魅力の追究

太 田 泰 子

エミリー・ディキンソンの詩は、死後百年以上経った今日、全世界で読まれる様になり、人気を増し、高い評価を受ける様にもなりました。そして、今、私を含めた文化の異った日本人にさえ熱心な愛読者があります。もしかすると、四行から精々数十行という詩の短かさ、極限まで凝縮した構成が、日本の短い詩歌を好む伝統に近い為、親しみ易いからなのかもしれません。彼女の詩の中には、時代と空間と文化の差を越えて人々の心に訴え、感動させる何かを持っているのです。そこで私は、読者を何が感動させ、秘きつけるのかという事を、二つの詩の分析を通して考えていきたいと思います。

まず最初に、彼女の詩は、美しい自然描写と、隠喩を使ったもの、又、それに心象を結合させているものなので、汚れきった現代を生きる人々には、新鮮で、一つ一つの美しい言葉が、心のやすらぎになるからだと思います。彼女の欲求と、人々の欲求は、孤独の中の満たされない欲求の願望と、ある意味では共通しているので、秘きつけられるのです。

さて、2つめの理由として、多くの場合、詩が難解だからです。彼女の詩は理解するのに大変だからこそ、いろいろなイメージを抱き、創造をかきたてられ、理解しようとするたびにのめりこんでいくのです。

結局、ディキンソンの詩が、人気を得、読者をひきつけた理由は、ディキンソンが、「人生の意味」、「人生の目的」といった、人間誰しもがもつ問題を扱った詩人だからなのです。特に現代の自由社会のような公的な、共通の信条が失われて、各自が自分で人生の意味を探り求めねばならない時代に、又、誠実に生きたいと願っている時代に、強い共感を呼ぶ詩だからなのです。このような詩に、人々は、すごく魅力を感じているのです。人生の根本的苦悩の問題はディキンソンの詩の中でも未解決に残されています。私は、これから生きていく上で、誰もが深く考えていかなくてはいけないのではないかと思います。ディキンソンの詩から学びました。自分の人生を自分らしく有意義に生きるにはどうすればよいか貧欲に考え、そして必ず解答をださなければいけないと思いました。更には、生と死、自分ではどうする事もできない問題、因果関係を探ってみようと思います。ディキンソンの詩は、現代の人々が考察しなければいけない、生と死の問題の追究を提示してくれたのです。又、彼女自身にも秘密めいた所が多くある事も、人気がでてくる理由だと思います。これからも、彼女自身、又、彼女の詩も、永遠に世界中の人々に愛され、読まれていく事と思います。

(指導教員 中村 敦志)

自然と人間生活－Ted Hughes 詩論

田 中 正 和

Ted Hughes は、1930年に、イギリスの Mytholmroyd (West Riding Yorkshire) で生まれた詩人である。1956年、彼はアメリカの女流詩人 Sylvia Plath(1932-63)と結婚する(詩人として Sylvia からの影響は無い)。その後、1959年頃から詩作に専念し、数々の賞を取り、D.H. Lawrence (1885-1930) などから影響を受け、自然(動植物や架空の生物など)から多くを取材し詩に取り入れる、自然詩人として知られ、又、人生の底知れぬ不気味さや、実在主義的な不安などが詩の主題となっている。60年代の代表詩人でもある。

“Full Moon and Little Frieda” という詩では、Hughes の最初の子供である Frieda Rebecca について書かれている。人生の血なまぐささや、残忍さ、暗さを “a dark river of blood”、“unspilled milk”、という言葉で表わし、次行の “moon” の明るさに対比されている。この様な「明るさと暗さ」又は「やさしさときびしさ」などの相反する表現を Hughes は好んで使っている。詩集 *Wodwo* の最初的一篇 “Thistles” という詩で Hughes は葉についたトゲを唯一の武器とし、人間や牛などの敵を相手に抵抗し続ける雑草の力強さを表し、同時に人間も強く生きなければならないという事もうたえていると思う。詩集 *Wodwo* の最後的一篇 “Wodwo” は、架空の生物の主題に使った詩である。これは、自分の姿や名前、大きさをさえもわからない一匹の生物が、「自分はいったい何をしているのだろう」という疑問を持ちながら、森の中を歩き回っている姿を、Hughes 自身がその生物になったかの様に、その生物の考えている事を書いて行くという発想がとてもユニークな詩だ。人間誰でも一度は「自分はいったい何で、ここで何をしているのか？」と考えたことがあると思うのです。Hughes はこのような考えを、一匹の生物に置き変えて書いた詩なのだと思います。

Ted Hughes の詩は、動植物などの自然を題材にし、そして、それを人間生活と掛け合わせて色々な事を我々に語りかけているのだと思います。それは人間の弱さや無気力であったり、生命の力強さであったり。Hughes は、これらの事を考え、想像しそして、詩として描いているのだと思います。

(指導教員 中村 敦志)

William Carlos Williams の詩の二面性

—その内面性と外面性についての考察—

鶴岡 裕巳

William Carlos Williams (1883-1963) という詩人は、アメリカの New Jersey 州生まれの詩人である。彼は長い詩人生活において長篇詩 *Paterson* (5 巻, 1946-58) を中心としてその他、長、短篇等を含めると膨大な量の詩を残している。大抵の詩人の場合、それぞれの詩人の持つ個性が詩ににじみ出て、それによって、ある種の詩における関連性というものがあるものだが、ウィリアムズの詩にはそれがないのである。言い換えれば、詩を読んで作者を判別することが困難であるといえるのだ。このように、膨大な作品がありそしてそれぞれの作品の関連性が少ないのであるが、詩における内面性と外面性という 2 つの視点から何とかまとめ上げてみよう。

ウィリアムズは初期の作品において Imagism の影響が多分に見られたのである。Imagism というのは、それまでの詩の持っている重々しい形式主義の詩に反抗して生じた自由詩運動であり、詩的内容的には深い意味は持たなくても、新しいリズム、自由な形式で詩を書くのである。ウィリアムズの初期の作品は Imagism の影響を受けていたため、明らかに外面的な特徴がみられるのである。

ウィリアムズは New Jersey 州 Rutherford という田舎町で生れ育ったのだが、*Paterson* はこの生れ故郷を主題として書かれた長篇詩である。この長篇詩はそもそも、ウィリアムズが長期戦になるのを覚悟で（実際に、全 5 巻で 12 年かかり、それでも書き終らなかった。）アメリカを詩に描こうという試みから初まった。ウィリアムズはなぜ長い時間を費やしてちっぽけな田舎町を描いたのだろうか。アメリカを描くのならば、近くの大都市であるニューヨークを取り上げてよいのではないか。これには何かウィリアムズなりのアメリカに対するある種の思い入れがあるに違いない。その理由を探る手がかりとして彼の代表的な詩集である *Spring and All* (1923) の中から、“Flight to the City” と “Spring and All” という 2 つの短篇詩を例に上げて論証することによってウィリアムズのアメリカに対する心情を探り出してみる。12 年もかけて *Paterson* を書いたという事実からも判断できるように、彼のアメリカに対しての情熱が彼の試作を一貫して支えているのであり、そのことが彼の詩の内面性と言えるのではないか。

(指導教員 中村 敦志)

生きる喜びを見いだせた詩人ディラン・トマス

渡 辺 武

1914年10月27日にイギリスのウェールズという街に生まれ、些か39年という短い生涯の大部分を病苦と貧困、過度の飲酒と喫煙によって苛まれ、第1次大戦後の経済的不況の時代から第2次大戦とその後の数年までとの間を生きたネオ・ロマンティズムの詩人、ディラン・トマス、そのなかで彼は人間の生と死、性と愛というテーマを選び200篇に近い詩をこの世に残した。彼が綴る詩は一般にイメージの弁証法といわれる方法を用いている為か、かなり難解なものが多い。これは彼のもつ1つのイメージにもう1つ別のイメージを対立さしめ、これにより生まれた新たなイメージに彼のもつ知的、批評的な聞力の一切を適応させるというもので、こうしたイメージが彼の詩の中には数多く登場する。このイメージの弁証法でさえこのように理解しがたいものだからトマス詩が難解なのは当然のことだろう。しかし、これが逆にトマス詩の魅力になっているともいえる。

イギリスの詩壇で、1940年代はディラン・トマスの時代といえることができる。イメージの弁証法、詩のなかへイメージを圧縮する力、そしてポエトリー・リーティングをはやらせる1つのきっかけとなった詩人であり、天才を感じさせてくれます。彼の詩は一見、言葉の論理というよりもイメージの論理で組み立てているようにみえますが、彼自身が言っているようにそういう生まれ出たイメージに自分の持てるあらゆる知的な、批評的な力を適用して詩を完成させているらしいのです。そこがシュルレアリスムと違うといえるところで、そういう点では非常に知的な要素が強いのだと感じます。そして彼の後の詩人達が多かれ少なかれ「私」という私小説ふうの視点を詩からはずさないで書いていくことになったのも彼の影響だろうと思われます。詩人のアイデンティティという問題がモダニズムの時代からだいたい問題になってきていて、どこに作品の焦点を求めたらいいかわからなくなってきた時代にトマスがもう一度アイデンティティというものを「私」というところに持ち帰ったというのは後退的な進歩だろうと思います。詩のもつ音楽性をきちんとした定型でわかりやすく聞かせ、イギリス国民はもちろん世界中の一般大衆から愛されたその詩人は最期まで生きることはおお至上の価値であり喜びであるということに僕らに確信させるに役立つことであろうと思われます。

(指導教員 中村 敦志)

セオドア・レトキ (Theodore Roethke) の憂鬱について

菊池泰秀

詩は他者へのメッセージという役割だけではなく、自己の内に向う意識をより巧みに具象化することによって広い意味での美を形成し、他者においてそれを普遍化させる力を持っている。詩と小説の違いは、端的に言って言葉を使う上での方法論の違いにすぎない。英文学史における産声が Ballad (物語詩) であったように元をたどれば同じような所にたどりつくに違いない。もちろん詩と小説は、時代の流れの中で、どこかつながりつつもそれぞれの可能性を求めて独自の変化を遂げてきている。英詩は20世紀に入ると、そのスタイルにおいてもテーマにおいても革新的な変化があった。

さて、ゼミナールではアメリカ現代詩ということで主に20世紀の英米詩人について学んできた。1910-30年代に全盛を期したイマジズムからモダニズムへといった詩人の「意識」と「スタイル」の変化やアバン・ギャルドやダダ、シュルレアリスムといった諸芸術運動を知ることによって、モダニズムの英語詩がイギリスのものというよりもアメリカ的現象といわれる理由がわかる。

まず、イギリスにおいてはイギリス詩の伝統(題材及び詩型)が詩人の変化を許さなかった。モダニズムの特徴である自由詩型の尊重、詩的構成における実験主義は伝統の乏しいアメリカにおいて根づき、詩人は画期的に新しくなることが求められたといっているだろう。ゼミナールで学ぶうちに現代詩人と呼ばれる様々な詩人の作品に触れることができた。そのなかでも先に上げたように、詩の中で意識の具象化を試みるセオドア・レトキに興味を覚えた。

セオドア・レトキは1908年5月25日にミシガン州サギノーに生まれ、父の経営していた農場の温室で遊ぶなどして幼年期を過した。ミシガン大学を卒業後はハーヴァード大学院に学んだ。その後は大学教授となり英語を教えていた。1936-43及び48年はペンシルヴァニア州立大学で教え、彼の処女詩集『開かれた家』(*Open House*, 1941)はその時代に出版された。レトキの詩的出発は1930年代にさかのぼり、この詩集の標題作 *Open House* にも当時のメタフィジカル詩の影響が感じられる。後期の作品と比べてみても、より観念的な色合いが強く、彼の詩の題材が社会性よりも自己認識に向っていると言える。この詩では自己開放がテーマになっている。開けひろげの家、すなわち心の開放である。しかし、この心の開放という観念は容易に結論づけられてはいない。心を完全にさらけだしてしまいたいといった欲求の下には、一種自閉症的な疎外感を含んだ精神の存在があるようだ。彼を憂鬱にさせたこの自己開放という観念も植物のなかに精神の具象をみるという手法で彼は才能を開花させていった。ステレオタイプという現代の憂鬱に彼の詩は積極的に新たな感受性を与えてくれる。

ゼミナールで英文のままの詩を読んだり、一人の詩人について取組んでみたのはいい経験となった。今後も積極的に詩の世界を追っていきたい。

(指導教員 中村 敦志)

ロバート・フロストにとっての自然と自己の感情

志 村 朋 宏

三年生から四年前期の約1年半のゼミナールにおける私の研究は、アメリカの詩についてでした。その中の詩人ロバート・フロストについて専門的にやらしていただきました。フロストという詩人は、アメリカのニュー・イングランド出身で、ダートマス大学に学びました。詩の特徴としては、自然描写的な詩が多く、単に自然描写というだけではなく、その詩の中に自分の感情や生活をとけ込ませています。

代表作として“Stopping by Woods on a Snowy Evening”があります。（「雪の降る夕暮れに、森の近くに、そりをとめて」）この作品は、雪の降る夕暮れの中で、そりにのって森の近くにさしかかった時に、雪の振りつもる森の美しさに心をひかれ、馬を止め、しばらくの間その様子を眺めた時の詩であると思う。この森の所有者の考えを予測し、自分なりに結論を出している。詩の中に出てくる馬に関しても、まるで馬を人間のような思想を持っている様に描いていると思う。最後に文中の私、多分フロスト自身だと思うか、思いが込められている部分がある。自分なりの考えでは、フロストは、いつまでもこの美しい景色を見ていたいという思いが感じられる。

ロバート・フロストは、長い間 Vermont の農場で生活していたことがあった。フロストはそこでニュー・イングランド地方の素朴な農民と自然を描いた。その時の一部で、“Putting in the Seed” “The Pasture” がある。“Putting in the Seed” は、田園に住む者に対しての春の喜びをうたった詩だと思います。その中に自分の生活をとけ込ませ、自然描写と自分の心情がうまくとけ合っていると思いました。種が発芽する状態に関しても、土をもりあげる力強い様子がうかがえます。“The Pasture” これは牧場という意味にとれました。牧場に春がおとずれた様子を、ニュー・イングランド人らしい、ひかえ目で、大げさな感じがほとんどしない表現で描いている様に思えた。その中に、自分が妻、もしくは、恋人を呼んでいる風な表現も見られる。これは、妻か恋人への呼びかけでもあるが、この詩を読む者に対しての誘いのようにもとれる。

フロストは、視覚として提示された情景を自己の心情や感情をもち込んで詩を書き、なおかつ、自然の様子も鮮明に描いている感じがします。

（指導教員 中村 敦志）

テド・ヒューズと動物の存在について

坪内伸人

テド・ヒューズは幼い頃から動物というものに大きく関心を持っていた。その中で彼は生き物の形、習性などを観察していく際に、生命という不思議さ、生命が持つ美しさ、その美しさと表裏一体をなす生命の残酷さを感じとっていた。彼の詩は何らかの形でこのような生命の持つ宿命的な残酷さと獣臭さがにじみでており、それが精密で客観的な描写と相まって大きく展開していく。

幼い頃、脱穀する時期になると、辺りを這い回る二十日ネズミを追いかけて、そして捕まえていた。また彼の兄と一緒に野山を這い回って、カササギやフクロウや兎やイタチやネズミなどを集めていたが、彼にとって兄が射ることができた動物では満足しきれていなかった。この時、彼の心の中にあった動物をつかまえることと、詩を追求し始めた熱情は舞台は違うけれど同じであった。それは彼にとって詩が一種の動物、まさに野山を駆け巡る生命あふれる動物であったからである。それによつてこの生命あふれる詩はどんな人格からも独立し、何物もそれに加えることも取り去ることもできないものなのである。もしそうしたのなら、詩は不具になってしまうか、あるいは死んでしまうかもしれない傷つきやすいものなのである。

しかし、彼の関心は特別に動物あるいは詩を追いかけることではなかった。彼の本当の心の内にあったものは、自分以外の生命をもつもの、生々とした生命をもつものを追いかけたのであった。事の全てがそうであったとしても、動物に対する関心は彼の人生が始まった時にすでに始まっていたのだった。彼の魂には幼い日を過ぎたヨークシャー高地の自然の荒々しさが異常なまでに刻印されていて、その幼い日の印象のまま、彼にとって自然は生涯超越的なものになっていった。この自然のすさまじいエネルギーにとりまかれている人間は無力と不安定であるが動物は激しい生の体臭とその裏につねにつきまとう死の匂い、そして得体の知れぬ神秘的な暗い情熱と恐怖感をもっている。動物の情熱と恐怖感がそのまま彼のものと重ね合わされて、動物の存在を描くことが、付加を除去をならぬ彼自身の実存を語っていることになる。

彼は自然と人間の和解をのぞみ、永遠に素朴で古く新しい人間のことを求め、時には幼い日に親しんだ動物のイメージを詩に登場させ、自分の心の中を展開させてゆく。あのふしぎな光の中に活動する彼の動物は単なる観察の対象ではなく、類いなき想像力による自然と生の象徴で、彼をとりまいてきた動物たちの存在が今の彼を作り上げてきたのだということをゼミナールを通じて深く理解することができた。

(指導教員 中村 敦志)